

鹿屋フィールドワーク

2023

〔報告書〕



はじめに——若者と地域とのつながり

大阪大学の学生が鹿児島県鹿屋市で防災や地域活性化の取り組みを学ぶフィールドワークをはじめて3年がたちます。これまで防災を主なテーマとしてきましたが、今年度（2023年度）は「若者と地域のつながり」をテーマとしました。若者が住み続けられるまち、一度離れた若者がまた地元に戻ってきたいと思えるようなまち、若者と地域のつながりをどのようにつくっていけばよいか等を、鹿屋市の行政、学校、企業、地域の取り組み等に学び、今後の施策や取り組みのあり方を検討することをねらいとしました。

鹿児島県や鹿屋市に限らず、全国のどの地方・地域においても人口減少は大きな課題の一つです。防災の取り組みも、特に地方においては少子高齢化や過疎化の課題と連動して取り組まれる必要がある、ということをこれまでのフィールドワークを通じて強く感じてきました。3年越しに鹿屋市の人口減少や地方創生という課題を正面から考える貴重な機会となりました。一方、私たち大阪からの「よそ者」は、鹿屋市に何度も足を運ぶ中で「関係人口」や「応縁人口」として鹿屋の皆さんから受け入れていただきました。鹿屋と大阪という距離を超えてどうやってつながり続けることができるかについては学生たちが自分事として実践してきましたが、今回は「鹿屋で育つ若者」がメインです。鹿屋で育つ（育った）若者がどのような思いや環境にいるのかについては、一からの学びでした。

鹿屋市の人口減少の要因の一つに、進学や就職等による「15歳～29歳の若年世代の転出超過」が挙げられています（『鹿屋市人口減少対策ビジョン』より）。フィールドワークの事前学習として、地方の高校生がどのような進路意識や進路実態にあるのかを統計調査や文献で調べることから始めました。その中で実際に高校生に会って交流がしたいという意見が出て、鹿屋市役所を通じて鹿児島県立鹿屋高校を紹介していただき、フィールドワーク期間中に鹿屋高校1年生とのワークショップと有志による進路相談会を実施することができました。「若者と地域のつながり」という広いテーマですが、高校生や（特に県外への）進学者がどのように鹿屋とつながることができるか、一度鹿屋を離れた若者がまた帰ってきたいと思うにはどうしたらよいか、特に学生たちは焦点を当てています。

本報告書は、こうした2023年度のPBL活動（2023年9月13～16日）とその報告会（2023年11月1日）をまとめたものです。PBLとは、「PBL（Project/Problem based Learning（プロジェクト型／問題解決型学習）」のことで、地域の課題解決を行う現場で学生たちが実社会の課題に学ぶ教育活動をいいます。インタビューや調査を実施するにあたってご協力いただいたのは鹿屋市役所の関係部署を始め、鹿屋高校、移住者、商店街振興組合や店舗、漁業協同組合の方々です。学生だけで活動したのでは得ることのできない経験や視点を多く得る機会となりました。一方で報告会では、調査結果をもとに学生が知見やアイデアを報告しましたが、参加くださった方々からの質問や意見によって学生の課題認識が深まり、アイデアがブラッシュアップされていく時間となりました。本報告書を読まれた皆さまからも忌憚のないご意見をいただければと思います。

2019年からSSI基幹プロジェクト（代表 稲場圭信大阪大学教授）を通じて鹿屋とのご縁が生まれました。このような機会を提供くださった鹿屋市役所の皆さま、PBLにご協力くださった皆さまに、この場を借りて深く御礼申し上げます。

今井貴代子

社会ソリューションイニシアティブ特任助教

目次

- 1. はじめに 2
- 2. 2023年の活動 3
- 3. 鹿屋フィールドワーク2023の趣旨 4
- 4. 鹿屋フィールドワーク2023報告会 10
- 5. 参加した教職員の感想 28

2023年の活動——地域の知恵

今、少子高齢、人口減少、自然災害、感染症、世の中は混とんとしています。安全も安心も不在です。『広辞苑』（第七版）によると、安全は「安らかで危険のないこと。平穏無事。物事が損傷したり、危害を受けたりするおそれのないこと」、安心は「心配・不安がなくて、心が安らぐこと」とあります。

「安全」は科学的な知見やエビデンス、すなわち専門知にもとづいて保証されている場合で、「安心」はその「安全」の保証が必ずしもない場合にも、そこに信頼がある状態と考えられます。しかし、信頼が集団的なものに強化されれば同調圧力ともなりえます。コロナ禍にあつて自粛警察も誕生しました。専門家の意見や政府見解に国民が右往左往しました。

多種多様な声、相反する考え方がある今、わたしたち一人ひとりは何を信じて意思決定し、行動すればよいのでしょうか。そのヒントを鹿屋市のPBL・フィールドワークで得たように思います。

何が正しいか不確定な状況下にあつて、社会の問題について、専門家、行政、市民、企業、多様な社会的アクターが意見を交換し、対話を通して社会的合理性を構築していくことも重要です。従来、専門家と一般市民の関係は、専門家から市民への知識の一方向の流れを仮定していました。その考え方は今も根強くありますが、社会生活においては一般市民の方が狭い分野に生きる専門家よりも賢明な判断ができるという主張もあります。民衆の知恵です。

「知は発明・生産されるが、知恵は発見・発掘される」ものと言えましょうか。どの地域にも、生活の営みの中に生き続けてきた知恵があります。そして、多様なアクターの共創により発明・生産される知とのハイブリッドにより、やっかいな社会課題が解決されるのではないのでしょうか。

今年度は、PBLに加えて、高須町での防災訓練・避難所受付システムの実証実験も一緒に取り組ませて頂きました。PBL関係者の皆様、高須町内会長をはじめ高須町と鹿屋市役所の方々に大変お世話になりました。ありがとうございました。防災の取り組みを続けていきたいです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

稲場圭信

大阪大学大学院教授（人間科学研究科・共生学）
SSI 協力プロジェクト「地域資源と科学技術による減災」代表
一般社団法人地域情報共創センター（RICCC）顧問

鹿屋フィールドワーク2023の趣旨

●鹿屋フィールドワーク 2023 の趣旨

鹿屋市は鹿児島県大隅半島のほぼ中心部に位置し、行政・経済・産業の中核を担う都市です。日本の多くの地方・地域と同じように、鹿屋市においても進学や就職を機に若者の人口流出が進み、少子化や労働力人口の減少、地域の産業構造の維持、地域資源や伝統の継承などさまざまな絡まり合った課題が存在しています。

2021年度から始まった鹿屋フィールドワークでは、これまで主に防災を切り口とした活動を行ってきましたが、2023年度は「若者と地域のつながり」をテーマにフィールドワークを行いました。若者が住み続けられるまち、一度離れた若者がまた地元に戻ってきたいと思えるようなまち、若者と地域のつながりをどのようにつくっていけばよいか等、鹿屋市の行政、学校、企業、地域の取り組み等に学び、その学びを通して今後の施策や取り組みのあり方を検討することになりました。

鹿屋市役所地域活力推進課 橋口理恵さんに窓口になっていただき、関連部署の施策や取り組みを紹介していただくとともに、Uターン・Iターン経験者との交流の場をもうけていただきました。鹿屋高校の生徒さんとの意見交換ワークショップを行う機会もいただき、また商店街や漁業協同組合などの現状を聞かせていただくなど、多くの方々に協力をいただき、「若者と地域のつながり」をテーマにしたPBLを企画・実施することができました。



鹿児島県及び鹿屋市の地図

●スケジュールと参加者

事前学習会を3回（1回は鹿屋高校の大園典子先生とのオンライン打合せ）実施し、現地でフィールドワークを行いました。訪問スケジュール、参加者は以下の通りです。

9月13日(水)	9月14日(木)	9月15日(金)	9月16日(土)
・鹿屋市役所 人口減少対策本部 政策推進課 ・ユクサおおすみ海の学校 繁昌孝充さん	・鹿屋市役所 学校教育課 移住グループ ・鹿児島県立鹿屋高等学校 高校生とのワークショップ 1年3組と5組のみなさん 大園典子先生 大学進学希望者の相談会 ・移住者との交流 等 黒坂美音さん、鳥越佳那さん、末次真啓さん、 和田泰樹さん、島崎由真さん、柳沼悠さん、繁 昌孝充さん、元村早希さん	・商店街振興組合 (A) 北田・大手町商店街 本村正亘さん Bee 蜂谷拓広さん (B) 本町一番商店街 遠矢達一さん、久木田 弘さん はるんち だいすけさん 文精堂書店 等	・鹿屋高校 文化祭の見学 ・鹿屋市漁業協同組合 漁船乗船体験 柿内隆幸さん

学生（7名）

- ・木本一希 工学部地球総合工学科 学部2年
- ・大野裕貴 人間科学部 学部3年
- ・神谷侑希 人間科学部 学部3年
- ・中丸萌 人間科学部 学部3年
- ・高野七緒 外国語学部スペイン語専攻 学部4年
- ・仲田晴奈 人間科学研究科 博士前期課程1年
- ・中野立開 人間科学研究科 博士前期課程2年

教員（4名）

- ・稲場圭信 人間科学研究科 教授
- ・川端亮 人間科学研究科 教授
- ・吉川徹 人間科学研究科 教授
- ・井上大嗣 社会ソリューションイニシアティブ研究員
- ・今井貴代子 社会ソリューションイニシアティブ特任助教





【参考】鹿屋市人口減少対策ビジョン



鹿屋市では2023年、鹿屋市の人口減少を抑制するとともに、人口減少社会においても地域の生活機能を維持することを目的にした「鹿屋市人口減少対策ビジョン」が策定されました。これは「第2次鹿屋市総合計画（第2期鹿屋市まち・ひと・しごと創生総合戦略）」（2019年～2024年度）に基づき実施されてきた事業を、人口減少対策の3つの視点（社会減対策、自然減対策、持続可能な地域づくり）から検証し、2023年から2032年の10年間に重点的かつ効果的に取り組んでいくことを定めた個別計画です。

「ひとが元気！まちが元気！『未来につながる健康都市 かのや』」をまちづくりの将来像に、また「2060年に9万人程度の人口を維持する」ことが人口の将来目標に掲げられ、4つの重点プロジェクトにおいて施策が展開されています（図参照）。

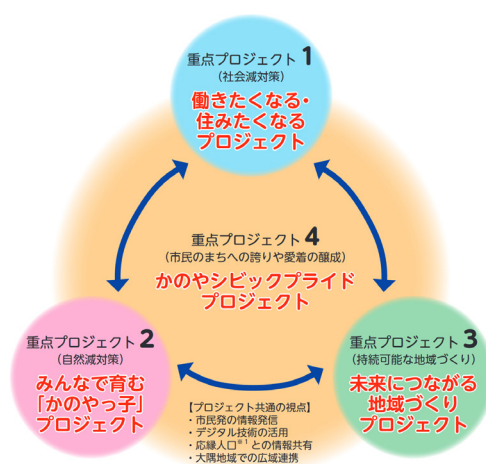


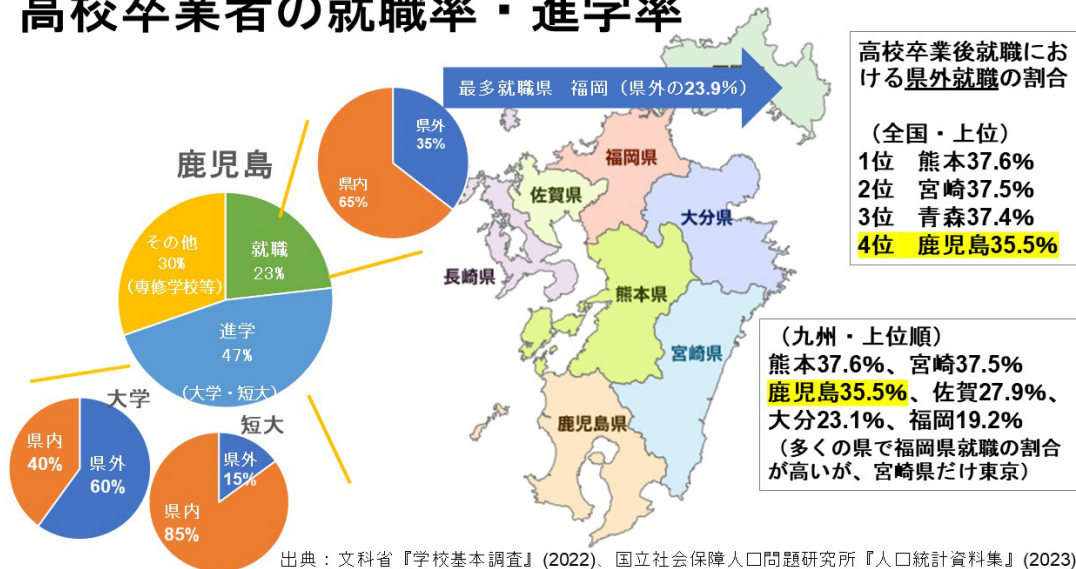
図 4つの重点プロジェクト

*1 応縁人口とは、地域と多様に関わる「関係人口」のうち、市外に住む本市出身者や本市と縁がある人で本市に関心を持ち、まちづくりを応援してくれる人々を意味する造語

鹿屋市ホームページより <https://www.city.kanoya.lg.jp/index.html>

【参考】 鹿児島県の高卒業者の進路～県内・県外～

高校卒業者の就職率・進学率



鹿児島県における高校卒業者の就職率は23%、大学・短大への進学率は47%です。この就職率23%という割合は全国平均と比べると高く、就職者のうち県内就職者は65%、県外就職者は35%です。県外の最多就職県は福岡県となっています。一方、大学進学の場合、県内よりも県外の大学へ進学する者が多く(60%)、短大の場合は逆で、県内の短大に進学する者が多いという結果になっています(85%)。

全国に目を向けると、高校卒業時における県外就職の割合が高いのは、熊本、宮崎、青森、鹿児島の順です。また、九州全体で見ると、高校卒業時における県外就職の割合が高いのは、熊本、宮崎、鹿児島、佐賀、大分、福岡の順です。多くの県で福岡への県外就職の割合が高くなっていますが、宮崎県だけは東京への県外就職が最も高くなっています。

高校卒業時点の就職を機に、そして大学進学を機に鹿児島県を出ていく若者たちが少なくない数でいます。その一方で、短大進学では8割が、また就職においても6割強が県内の進路先となっています。

【参考】鹿児島県で生まれた人の地域移動

～出生県からの転出（県外移動）とUターン～

Uターンの人が地域にどれだけいるかについては、ほとんど統計がとられていないため正確に把握することができないのが実情です。そこで2016年の社会保障・人口問題基本調査を参考にして全国と鹿児島県の動向や傾向をおさえてみたいと思います。

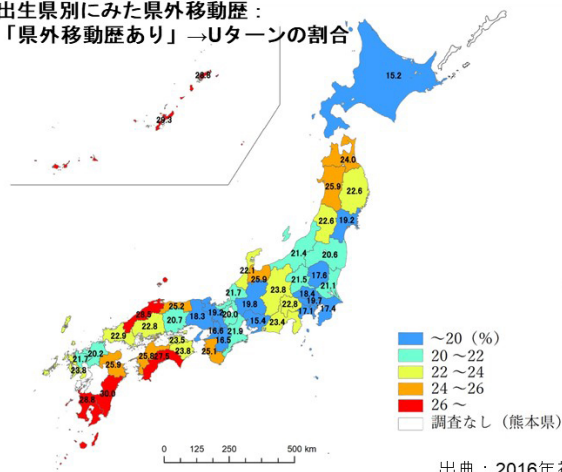
出生都道府県別に見て、県外移動歴の割合が最も高いのが島根県（1位）で、66%の人が県外移動を経験したことがあると答えています。そして2位が鹿児島県で65%です。では県外移動をしてUターンで戻ってきた人の割合はどうでしょうか。高い順に、宮崎、沖縄、鹿児島となっています（鹿児島は28.8%）。

この調査を参考にして鹿児島県で生まれた人の地域移動を見てみると、鹿児島県で生まれた人のうち、移動なく県内に住み続けている人が28.2%、県外移動してUターンで戻ってきた人が28.8%、Uターンせず県外に転出したままの人が36.7%という割合になります。

鹿児島県は県外へ転出する人が多い地域ともいえますが、同時にUターンで戻ってくる人も多い地域といえます。また同じ割合で県内に住み続けている人もいます。この3つの層のそれぞれにとって、住み続けられるまち、一度離れてもまた地元に戻ってきたいと思えるようなまち、地域とのつながりがあるかを考えてみる必要があります。

県外移動／県外移動→Uターン

出生県別にみた県外移動歴：
「県外移動歴あり」→Uターンの割合



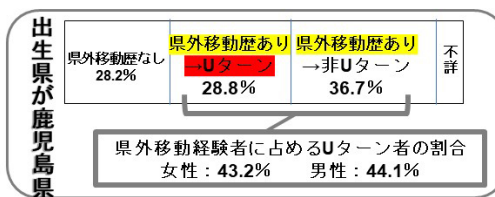
出生都道府県別に見て（全国）

＜県外に移動した経験のある人の割合＞

1位 島根県 66.2%
2位 鹿児島県 65.5%

＜Uターン者の割合＞

1位 宮崎県 30%
2位 沖縄県 29.3%
3位 鹿児島県 28.8%



出典：2016年社会保障・人口問題基本調査「第8回人口移動調査」
（対象世帯数67098、対象世帯数に対する回収率73.4%、有効回収率72.7%）

鹿屋フィールドワーク2023報告会

日時：2023年11月1日(水) 18:00～19:30

場所：オンライン／ハイブリッド

鹿屋会場：鹿屋市役所庁議室

内容：

- ・挨拶（稲場圭信 大阪大学教授）
- ・フィールドワークの概要（本誌、割愛）
- ・学生の報告
- ・参加者全員で意見交流
- ・挨拶（郷原竜児 鹿屋市 市長公室 市長公室長）
- ・挨拶（川端亮 大阪大学教授）

参加学生（オンライン）

木本一希、大野裕貴、神谷侑希、中丸萌、高野七緒、仲田晴奈（以上、大阪から）、中野立開（カポエラに関するフィールドワーク調査で滞在しているブラジルから）

2023年度は「若者と地域のつながり」をテーマに、若者が住み続けられるまち、一度離れた若者がまた地元に戻ってきたいと思えるようなまち、若者と地域のつながりをどのようにつくっていけばよいか等を考えるため、9月13日～16日、鹿屋市の行政、学校、漁業、商店街等の取り組みに学び、高校生や地域の方々と交流するフィールドワークを行いました。調査や活動を通じてわかったこと、気づいたこと、課題解決に向けたアイデアなど、7名の参加学生による報告会を開催しました。オンラインで大阪と鹿屋をつなぎ、鹿屋会場にはお世話になった鹿屋市役所の皆様にご参集いただきました。以下は報告会の様子です（一部、割愛）。



大阪大学×鹿屋 in 鹿児島
フィールドワーク2023 報告会

オンライン開催
2023年11月1日(水) 18:00～19:30

2021年度より、大阪大学の学生が鹿児島県鹿屋市の防災やまちづくりなどの取り組みを学んでいます。2023年度は「若者と地域のつながり」をテーマに、若者が住み続けられるまち、一度離れた若者がまた地元に戻ってきたいと思えるようなまち、若者と地域のつながりをどのようにつくっていけばよいか等を考えるため、9月13日～16日、鹿屋市の行政、学校、漁業、商店街等の取り組みに学び、高校生や地域の方々と交流するフィールドワークを行いました。調査や活動を通じてわかったこと、気づいたこと、課題解決に向けたアイデアなど、7名の参加学生による報告会を開催します。ふるってご参加ください。

応募フォームはこちら
<https://forms.gle/3a8kJ4c7my2gWdwP7>

ご希望の方は、10月31日までに参加申込フォームにご記入ください。オンライン参加用 ZOOMのURLをお送りします。

文部科学省「実社会に活用するコミュニケーションの推進事業」：大阪大学「社会ソリューションコミュニケーション 育成事業」
社会ソリューションイニシアティブ (SSI) 問い合わせ先: imai@ssi.osaka-u.ac.jp (今井貴代子)

報告会のチラシ



鹿屋会場の様子



オンラインの様子

挨拶 稲場圭信（大阪大学教授）

稲場：大阪大学の稲場です。皆さん、こんばんは。鹿屋市と大阪大学の縁はもう4年になります。PBLは3年ということで、その前からの取り組みというものも合わせますと4年になります。その間、役所の方々に最初の年にお世話になりご定年になった方がいらっしゃったりとか、また異動されたりとか、そういったこともありました。また学生も、継続している学生もいれば、やはり卒業したりとか、そういうふうに変ってきています。そしてPBL、この3年間の間でテーマ自体も変化してきたということですが、一方で鹿屋市の皆さん方は変わらず温かく学生を受け入れてくださっていることにとっても感謝しております。ありがとうございます。本日は多くの方が鹿屋市でご参集してくださっているということで、夕方のこの時間にもかかわらず、ありがとうございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。私からは以上です。



報告：「若者と地域のつながり」

大野裕貴：学生報告の司会をします、大野です。本日の発表の目次、アジェンダです。まず1点目が活動内容の報告をさせ

司会
仲田→神
谷→中丸
→木本→
しき→大
野→中野



鹿屋市PBL活動報告2023

テーマ：若者と地域のつながり

1

司会

目次



1. 活動内容報告
2. PBLからわかった現状と課題
3. 具体的施策
 - a. 施策1：仕事に対する不安払拭
 - b. 施策2：SNS・アプリの利用者増加
 - c. 施策3：奨学生のUターンを促す
 - d. 施策4：教育水準の向上
 - e. まとめ
4. 質疑応答

2

ていただければと思っています。その後PBLからわかった現状と課題、そしてそれに対応するように具体的な施策4点ほど考えてきましたので、ぜひお聞きいただければ幸いです。最後に質疑応答の時間をいただければ幸いです。そうしましたら、活動内容報告に移っていききたいと思います。

活動内容報告

木本一希：まず1日目に鹿屋市役所に伺って鹿屋市の人口の現状について話を伺いました。鹿屋市の人口減少対策の課題として、学生の進学動向だとか高校生との交流、そしてUターンの取り組みについて話を聞きました。また、現時点で考えられる対策を伺い、市内の就職先や雇用の創出、市外へ出た人との鹿屋市のつながりについての取り組みについて伺いました。事前学習を複数回おこないましたが、市役所の皆さんに鹿屋市について伺うことができ鹿屋市に対する理解が深まりました。僕個人としては、高校生との交流、「高校生が未来を語る会」がとても印象的でした。

*「高校生が未来を語る会」は活躍するU・Jターン者から話を聞いたり、高校生同士で意見交換をするなどして、高校生が「住み続けたい、将来帰って来たい地元」について考えるきっかけを提供する取り組みで、鹿屋市内の各高校の生徒会役員などが参加している。

木本

鹿屋市の人口減少対策ビジョン

日時：9/13 13:50-15:30

場所：鹿屋市役所

概要：市役所の方々（郷原さん、黒木さん、小村さん、藤田さん）からの説明と質疑応答

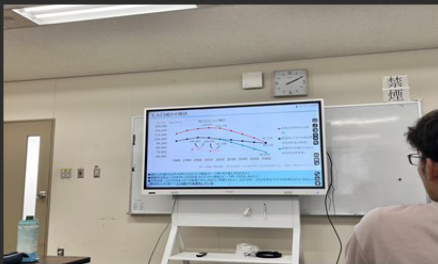
1. 鹿屋市の人口現状について

2. 鹿屋市の人口減少対策の課題

- 学生の進学動向について
- 高校生との交流について
- Uターンの取り組みについて

3. 現時点で考えられる対策

- 市内の就職先、雇用の創出（企業誘致）
- 市街へ出た人と鹿屋市のつながりについて
- →応募人口、関係人口の層を厚くする



4

高野

鹿屋市の教育

日時：9/14 9:15~10:40

場所：鹿屋市役所

概要：柿谷志喜さん

● 鹿屋市の教育状況について

- 鹿屋市公立小中学校の現状について
- 中3進路希望状況に関して

● 鹿屋市におけるキャリア教育

- 教員向けの研修会の実施の内容
- 県内で働いている方を中学校に招いた講演会



6

神谷侑希：続いて、ユクサおおすみ海の学校を訪問しました。まず施設見学を繁昌さんの案内や説明のもとに行いました。続いて、繁昌さんから話を伺いました。その内容としては、ユクサや菅原地域の地域おこし活動である「菅原地域づくり協議会」について、またユクサと地域の方々との関わりについて、そしてユクサを含めた鹿屋周辺の観光について、

繁昌さんの見解を交えつつ、さまざまな角度からお話をお伺いすることができました。その後はユクサの外の海辺などを散策して景色などを楽しみました。

高野七緒：2日目の午前には市役所で教育委員会の柿さんに鹿屋市の教育施策についてお話を伺いました。規模、教育の現状やキャリア教育における取り組みを伺いました。そのなかで特にキャリア教育に力を入れているという印象を受けました。キャリアパスポート、職場体験、キッズビジネスタウンや職業人による講演会などさまざまな取り組みをされていると知ることができました。

神谷：続けて、鹿屋市の移住政策について須山さんと八木さんから話をお伺いしました。内容といたしましては、国や鹿屋市の移住政策で、具体的には、その目標だったり、支援金とか、移住サポートセンターなど、具体的な施策をお伺いしました。また、鹿屋市の移住の現状とその課題について、最後に学生から気になった点をいくつか質問させていただきました。

神谷

鹿屋市の移住施策について

日時：9/14 10:40-12:00

場所：鹿屋市役所

概要：須山さん、八木さんから
移住に関する話を伺う

- 国・鹿屋市の移住政策
 - 目標
 - 具体的施策
- 移住の現状と課題
- 質疑応答



7

高野

鹿屋高校WS

日時：9/14 13:00~17:00

場所：鹿屋高校

概要：鹿屋高校の生徒向けに「大隅半島を知るワークショップ」を実施

1. ワークショップ
 - 大隅半島の住みやすい・住みにくい点
 - 理想の大隅半島へのイメージ
2. 進路相談会
 - 勉強面
 - 生活面



8

高野：次に鹿屋高校1年生の高校生に対して「大隅半島を知るワークショップ」を開催しました。大隅半島の好きなところ、どういう場所に住みたいかなど、大隅半島の理想像を高校生から聞きました。また放課後には大学進学希望者の進路相談会を開催しました。われわれの受験勉強のことや大学後の生活について伝えました。進路選択にやはり個人差は大きいという印象を受けます。県外進学に不安を持つ方もいれば、中堅大学が少ないという理由で、どうしても地元を出

ないといけないという意見もありました。「地元を離れてみたい」、「離れるしかない」という意識があるものの、九州から出ていくことに不安を感じているのではないかという印象を受けました。全体を通して活発で、こういったイベントにすごく前向きな姿勢を見せてくださる方が多いと思いました。

神谷: その日の夜は「春夏酒冬」で移住者交流会を行いました。参加者は大阪大学から先生方を含めて9人、市役所の方が3人、地域おこし協力隊の方が3人、移住者の方が2人でした。ここでは夜ご飯を楽しみながらお話をしてさまざまな考えや経緯などを聞くことができました。具体的には、市役所の方々からは鹿屋で働く理由だったり、鹿屋へどうして移住してきたかなどについて聞くことができました。地域おこし協力隊の方々からは、参加した理由や経緯、これまでの経歴について、移住者の方々からは、移住のきっかけだったり、現在の鹿屋での生活について、そのほか皆さまからは、普段の生活や鹿屋の魅力、課題、鹿屋に対しての思いなどをお聞きすることができました。人によってこういった思いだとか、鹿屋に来た経緯というのがさまざまで、すごく興味深くお話をお伺いすることができました。

神谷

移住者交流会



日時：9/14 19:00~

場所：春夏酒冬

参加者：大阪大学から9人、市役所の方3人、地域おこし協力隊3人、移住者2人

概要：夜ごはんを楽しみつつ、お話を伺う

- 市役所の方→鹿屋で働く理由、鹿屋への移住について
- 地域おこし協力隊→参加した理由・経緯、これまでの経歴
- 移住者→移住のきっかけ、現在の生活
- その他：普段の生活、鹿屋の魅力・課題、鹿屋に対しての思いなど

9

中丸

商店街①



日時：9/15 10:00-15:00 (途中昼休憩を挟む)

場所：北田大手町商店街

概要：現状と今後の展望についてインタビュー

- 北田大手町商店街振興組合（本村正亘さん）に話を伺う
 - 商店街の歴史について
 - 現在の取り組み・展望について
 - 学生との交流について
- Bee（蜂谷拓広さん）に話を伺う
 - 現在に至るまでの経緯について
 - 鹿屋市で活動することの特徴について
 - 鹿屋市に対する思い



10

中丸萌: 最終日は2つのチームに分かれまして、2つの商店街でインタビューに取り組みました。北田・大手町商店街さんのほうは私が入ったチームでして、最初に今日もいらしてくださっている本村さんにお話を伺いました。本村さんからは、これまでの商店街の歴史や今おこなってらっしゃること、今後の展望、そして私たち以外の学生と交流をされているとのことでしたので、そういったお話を聞くことができました。その後、お昼休憩を挟みまして「Bee」の蜂谷さんにもお話を伺うことができました。蜂谷さんは鹿屋高校出身ということでしたので、鹿屋高校卒業後、鹿児島県鹿屋市を出てか

ら、そしてまた戻ってきてBeeを経営される現在に至るまでのその経緯についてであったり、鹿屋市で活動することの特徴、そして今、鹿屋市に対して抱いている思いなどを伺うことができました。

もう1つのチームは、本町一番商店街に足を運びまして、そちらでもインタビューをおこないました。こちらでは遠矢さん、久木田さんにお話を伺って、これまでの商店街の隆盛について、鹿屋市全体の課題についてのお話を伺いました。ほかにも文精堂書店さんに行きまして、その書店の歴史や最近の状況について、そしてイタリアンレストラン「はるんち」でだいすけさんにお話をうかがいまして、はるんちの説明をしていただき、鹿屋市を取り巻く現在の状況についてのお話を伺いました。以上が概要です。

中丸

商店街②

日時：9/15 10:00-15:00 (途中昼休憩を挟む)

場所：本町一番商店街

概要：現状と今後の展望についてのインタビュー

1. 本町一番商店街振興組合（遠矢達一さん、久木田弘さん）にお話を伺う
 - これまでの商店街の隆盛について
 - 鹿屋市全体の課題について
2. 文精堂書店（小柳さん）に話を伺う
 - 書店について
 - 最近の状況について
3. はるんち（だいすけさん）に話を伺う
 - はるんちについての説明
 - 鹿屋市を取り巻く現在の状況について



11

大野：続いて、課題と施策の提案のほうに移りたいと思います。今回、人口減少対策のためにこういった取り組みができるかといったことを軸に据えて考えてきました。ぜひ、参考にいただけると幸いです。

PBL からわかった現状と課題：人口減少・Uターンに着目して

仲田晴奈：まずはPBLを通して分かった現状と課題ということについて人口減少とUターンに着目してお話ししていきます。

まずは現状についてです。皆さんのお話ですとか、移住者の方々のお話、または鹿屋高校でのワークショップ等々、いろんな方からお話を聞いてわかった現状というのは、ご覧のとおりになっています。

仲田

PBLから分かった現状

- 若者が進学、就職で市外に出ていくことは仕方がない
- 地域への愛着が強い、結婚や出産などのターニングポイントで価値観が変わったなどの理由で「鹿屋に帰ろうかな」と思うタイミングはある
- 鹿屋に帰ろうと思っても、仕事に対する不安（職種や業種の少なさ、給与水準の低さ）、子供の教育環境への不安が大きい
- 鹿屋の情報を発信しているSNSやアプリのフォロワー・利用者が少なく、情報が伝わっている感じがしない
- 県外へ出た学生への支援として奨学金があるが、Uターンのきっかけにつなげられていない

15

まず若者が進学とか就職で市外に出ていくということは、ある程度仕方がないことなのかなというふうに感じました。ですが、地域への愛着が強かったり、結婚や出産などのターニングポイントで価値観が変わったなどの理由で「鹿屋に帰ろうかな」と思うタイミングというのは個人にある状況なのではないかなと感じました。そしてそうした「鹿屋に帰ろうかな」と思うタイミングはあるものの、何がネックになっているのかというところに関しては、仕事に対する不安が挙げられます。具体的には、職種や業種の少なさであったり、給与水準の低さというところが気になっている、ですとか、子どもの教育環境への不安が大きいというところがあるのではないかなと感じました。また、皆さまのお話が主にここに関連してるんですけども、鹿屋の情報を発信しているSNSやアプリのフォロワーとか利用者が少なく、情報があまり伝わっている感じがしないという話もお伺いしました。最後に県外へ出た学生への支援として、現在は奨学金があると思うんですけども、それが学生たちのUターンのきっかけにつながっていないのではないかなということもわかってきました。

仲田

課題

「帰ろうかな」を「帰る」に繋げるきっかけづくり・不安の払拭

課題1

仕事に対する不安の払拭

- 職種や業種の多様性向上
- 給与水準の上昇

課題2

SNS・アプリの利用者増加

- 鹿屋と縁のある人と鹿屋の繋がりを断たない
- 鹿屋の情報を伝え続ける

課題3

奨学生のUターンを促す

課題4

教育水準の向上

16

ここから、「帰ろうかな」を「帰る」につなげるきっかけづくり、不安の払拭というのが大きな課題ではないかと考えました。これには4つの小さな課題が含まれています。課題1は、仕事に対する不安の払拭。具体的には、職種や業種の多様性向上と給与水準の上昇といったことがあげられます。課題の2つ目は、SNSやアプリの利用者の増加で、このことによって鹿屋と縁のある人と鹿屋のつながりを断たないことだったり、鹿屋の情報を伝え続けるということが重要になるのではないかと考えています。課題の3つ目は奨学生のUターンを促すこと。課題の4つ目は教育水準の向上です。

施策提案：「帰ろうかな」を「帰る」に繋げるきっかけづくり・不安の払拭を目指して

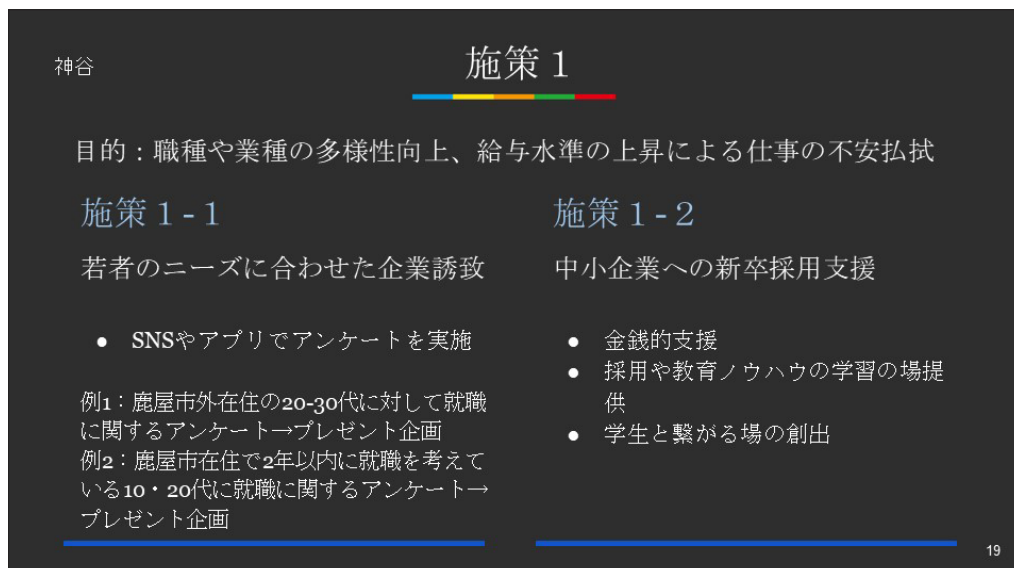
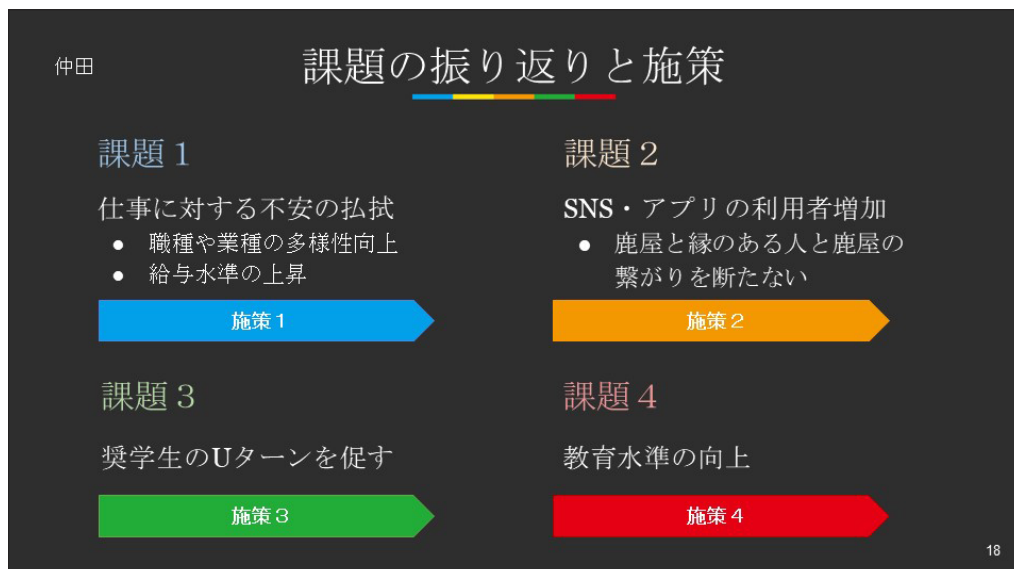
ここからは具体的な施策についてのお話に移っていきます。先ほどまでお話ししてきたように、人口減少を食い止める、またUターン人口を増やすためには、これらの4つの課題の解決を目指す必要があります。課題1は仕事に対する不安の払拭。課題2はSNS、アプリの利用者増加。課題3は奨学生のUターンを促す。課題4は教育水準の向上でした。これら4つの課題に対して、施策1から施策4までそれぞれ考えてまいりましたので、これからご提案させていただければと思います。

課題1 仕事に対する不安の払拭

神谷：まず職種や業種の多様性向上、給与水準の上昇による仕事の不安払拭のためにできることとして3つ提案させていただきます。

提案① 若者のニーズに合わせた企業誘致

1つ目は、若者のニーズに合わせた企業誘致をおこなうことです。この若者のニーズという部分を把握するためにSNSやアプリでアンケートを実施するのがよいのではないかなというふうに考えました。具体的なアンケートのやり方としては、まず1つ目は、鹿屋市に住んでいたけど、鹿屋市外に出てしまった就職を控える20代や30代の若者に対して就職に関するアンケートを実施します。でも、おそらくアンケートを配布するだけではやってくれない人も多いのかなというふうに考



えたので、プレゼント企画も一緒におこなったらいいいのではないかと考えました。プレゼントの内容としては、鹿屋市に
関係するものとして例えば鹿屋までの航空券だったりとか、あとは鹿屋のお肉だったり、鹿屋の名産をプレゼントとして
利用するのがいいのではないかと考えました。

例の2つ目としては、今度は鹿屋市内に住んでいる人で、2年以内に就職を考えている10代、20代の若者に対して就職
に関するアンケートを実施し、こちらも同様にプレゼント企画を実施します。こちらのプレゼントの内容として、鹿屋市内
の飲食店で使えるクーポン券や商業施設で使える割引券などがいいのではないかと考えました。こちらのプレゼント企
画でかかる費用面については、後ほどの施策で説明させていただきます。

提案② 中小企業への新卒採用制度

続いて、施策の2つ目です。2つ目は中小企業への新卒採用支援です。ここでいう中小企業は、鹿屋市にある例えば飲
食店のBeeだったりとか、ユクサおおすみ海の学校などがあげられると考えております。具体的な内容としては、採用や
教育に対する金銭的支援、採用や教育ノウハウの学習の場の提供、学生とつながる場の創出です。学生とつながる場の
具体例としては、例えば鹿屋市内の中小企業を集めて合同説明会をおこなうだったりとか、職業体験を実際にこうい
った中小企業で学生がおこなってみるといった内容です。

提案③ テレワークを推進する企業との協定・タイアップ

3つ目の施策は、テレワークなどを推進する企業との協定締結、タイアップをおこなうことです。例えば富士通という

企業は、ワーケーションパートナーシップというものをおこなっていて、富士通の社員に対して協定を締結した地域でワーケーションをおこなうことを推奨していたり、あとは提携を結んだ各地域コミュニティと協働してワーケーションプログラムだったり、地域の課題と一緒に取り組んだりすることを実施しています。

右の図は、富士通がその協定を結んでいる地域になるんですけど、いろいろな地域と結んでいて、九州だと長崎県だったり大分県、日向市などと結んでいます。実際に富士通と結ぶかは別として、こういったテレワークなどを推進している企業はたくさんあると思うので、そのなかのどこかの企業と協定を結ぶのは、1つの手ではないかというふうに考えました。

神谷
施策 1

目的：職種や業種の多様性向上、給与水準の上昇による仕事の不安払拭

施策 1-3

テレワークなどを推進する企業との協定締結・タイアップ

- 富士通
ワーケーションパートナーシップ
→ワーケーションの実施を推奨
→各地域コミュニティと協働しワーケーションプログラムを実施



出典：ジトラニュース「テレワークの新しい形「ワーケーション」を通じて地域貢献を図る」
<https://www.fujitsu.com/jp/microsite/fujitsutransformationnews/2023-01-18/01/>

20

課題2 市内外のつながりを生み出す SNS・アプリ利用者の増加

木本：施策2つ目として、鹿屋市以外の人とのつながりの維持という観点から、2つ提案を考えました。鹿屋市在住の方だけでなく鹿屋市に住んでいない方にも、鹿屋市の情報が生活に溶け込んでいるといえますか、身近に情報が入ってくることで、人生設計の選択肢の1つとして鹿屋市へのUターンが浮かび上がってくるのではないかと考えました。

提案① 定期的なプレゼント付き企画

まず1つ目として、SNSやアプリで定期的にプレゼント付きの企画を実施するというものです。2週間とか、それぐらいの短いスパンで就職に関するアンケートだとか、鹿屋市をテーマにしたフォトコンテスト、また鹿屋あるあるグランプリ

木本
施策 2

目的：SNSやアプリの利用者を増やし、鹿屋市外の人との繋がりを持ち続ける

施策 2-1

SNSやアプリで定期的にプレゼント付きの企画を実施する

- 就職に関するアンケートに回答することでプレゼントゲット
- 鹿屋をテーマにしたフォトコンテスト
- 鹿屋あるあるグランプリ

施策 2-2

アプリに機能を追加

- 鹿屋市内在住の住民が発信できるようにする。
- 学生発信：学生目線からの鹿屋市、学校生活の情報発信（広報誌のような内容でラジオや動画での発信も）
- 市民発信：思い出スポットマップ

21

等を開くことで、地域に住む人たち同士の交流を深めることを考えました。

提案② 鹿屋情報の住民発信・学生発信を可能にするアプリ

2つ目として、アプリに機能を追加するというものです。3つ考えまして、1つは鹿屋市内在住の住民が発信できるようにするという事です。鹿屋市の住民の方々が自ら情報を発信することによって鹿屋市に対してより理解が深まるという、横のつながりがよりできるのではないかと考えました。また、次に学生の発信です。学生目線の鹿屋市、学校生活の情報発信をラジオや動画等での発信もおこなうことで、鹿屋市以外の方たちが、今は住んでいないですけど、今の鹿屋市の学生たちがどういう学生生活を送っているかだとか、どういうところによく行っているのかなどがわかることで、この縦のつながりといいますか、その部分が強固になるのではないかと考えました。また、思い出スポットマップをつくることで観光地の誘因にもなると考えました。

提案③市内外のつながり事業をふるさと納税の寄付先に

中丸：次にこれまでプレゼント企画を通してアンケートに答えてもらうといった施策を紹介させていただいたのですが、そういったSNSやアプリの運用、プレゼントに関わる資金を、ふるさと納税で寄付というかたちで資金を集めるのはどうかという提案をさせていただきます。

ふるさと納税のなかには、使い道を指定した寄付というかたちでお金を集めることができます。例えば、これはあくまでも例えになるんですけども、鹿屋にゆかりのある若者の定住促進のための支援金枠をつくったりですとか、そういったかたちでSNSやアプリの運用、プレゼントに関わる資金を集めるというの、また1つの手かと思います。こういったふるさと納税のなかにも、物品をそのまま渡すだけではなく、寄付というかたちを活用するというものを提案させていただきます。

中丸

施策 2

目的：SNSやアプリの利用者を増やし、鹿屋市外の人との繋がりを保ち続ける

施策 2-3

SNSやアプリの運用・プレゼントに関わる資金をふるさと納税で寄付してもらう。

使い道を指定した寄付で「鹿屋にゆかりのある若者の定住促進のための支援金」枠をつくる。

ふるさと納税・鹿屋市 > 使い道から探す > 観光・交流・定住促進

ふるさと納税を使い道から探す

寄付の使い道から探す

教育・人づくり	健康・医療・福祉	こども・子育て
環境・衛生	地域・産業振興	スポーツ・文化支援
まちづくり・市民活動	観光・交流・定住促進	安心・安全・防災
災害支援・復興	おまかせ	その他

観光・交流・定住促進に関する寄付の使い道一覧

4 定住と関わりのあるまちのために
様々なイベントの開催や、陸海空の交通の要衝としての機能を活かし、交流人口の拡大に努めるほか、画期的な魅力ある「グルメ」を磨き上げ、「食の産業化」を推進します。

北海道 鹿屋市

北海道 鹿屋市の使い道詳細はこちら。

課題3 奨学生のUターンを促進

大野：施策の3つ目なんですけれども、奨学生のUターンを促すためにどういったことをおこなえばいいのかといった点について考えてまいりました。

提案 返済免除・減額、奨学生の就職説明会や意見交換会への参加

施策の1点目としましては、Uターンした場合の返済免除・減額をおこなうことが1つ有効なのではないかと考えています。奨学金返済の負担を軽減することはもちろんなんですけれども、この返済免除・減額をおこなうことによって、Uターンが促進されるのではないかと考えています。次、2点目なんですけれども、就職説明会への参加です。こちらは奨学生が就職説明会で実際に経験についてお話しすることによって、鹿屋とのつながりを維持することが狙いと

施策 3

目的：奨学生のUターンを促す

施策 3-1

Uターンした場合の、
返済・免除・減額

- 奨学金の返済の負担を軽減&Uターンの促進へ

施策 3-2

就職説明会への参加

- 鹿屋とのつながりを維持する狙い

施策 3-2

「本気で語る会」など
意見交流会への参加

例)「Uターン」について考えるをテーマに設定

23

なっています。続いて3点目なんですけれども、「“本気”で語ろう会」などの意見交流会への参加です。こちらは、例えば「Uターンについて考える」をテーマに設定することで、もちろん奨学生が考えることもそうなんですけれども、それに参加する学生もUターンについて考えるいいきっかけになるのではないかと考えています。

* 「“本気”で語ろう会」は、「“もっと身近な”、“もっと熱い”、“もっと分かりやすい” 市政運営」の取組の1つとして、「市民が主役」のまちづくり、共生・協働のまちづくりを推進していくことを目的に、市民と市長が本音で鹿屋の未来を語り合う意見交換会の取り組みのこと。

課題4 教育水準の向上と市外の若者とのつながりづくり

続いて施策の4点目です。目的としましては、あらためて教育水準の向上、市外の若者とのつながりづくりを考えています。

提案 市外への進学者と市内の学生をつなぐ家庭教師マッチング制度

施策の1点目なんですけれども、家庭教師のマッチング制度を設けるのはどうかといった点です。具体的な説明としましては、鹿屋市外に進学した人と、鹿屋市内の学生の家庭教師のマッチングをおこなうことができるのではないかと考えています。もちろん教育水準の向上が図られるのはそうなんですけれども、鹿屋市内外の若者同士のつながりも、こういったマッチング制度によって生まれるのではないかと考えています。

施策 4

目的：教育水準の向上・市外の若者との繋がりづくり

施策 4-1

家庭教師マッチング制度

- 鹿屋市外に進学した人と鹿屋市内の学生の家庭教師マッチング
- 教育水準の向上と同時に、鹿屋市内外の若者同士のつながりも生まれる

施策 4-2

塾・家庭教師代助成金制度の導入

- 大阪府で実施されている「習い事・塾代助成事業」を参考に



24

続いて、施策4の2のほうに移っていききたいと思います。こちらは塾・家庭教師代助成金制度の導入といったものです。こちらは現在、大阪市で実施されている「習い事・塾代助成事業」のほうを参考にさせていただきました。もちろんこれは所得制限によってその給付ができるかどうかといったものはあるんですけども、こういった制度を導入することによって教育水準の向上だったりとか、市外の若者とのつながりづくりが生まれるのではないかなというふうに考えています。

仲田:ここまでのまとめです。施策1から4について紹介してきました。施策1は職種や業種の多様性向上、給与水準の上昇による仕事の不安払拭を目指すものでした。施策2は、SNSやアプリの利用者を増やし、鹿屋市外の人とのつながりを保ち続けるということを目的としておりました。施策3は奨学生のUターンを促すことを目指しています。施策4は教育水準の向上、市外の若者とのつながりづくりの創出というところを目的にしておりました。これら4つの施策を実行することで「帰ろうかな」を「帰ろう」につなげるきっかけづくり、またUターンへの不安払拭というところを達成できるのではないかなと考えております。以上で現状と施策についての発表を終わりとさせていただきます。

仲田

まとめ

施策1：職種や業種の多様性向上、給与水準の上昇による仕事の不安払拭

施策2：SNSやアプリの利用者を増やし、鹿屋市外の人との繋がりを保ち続ける

施策3：奨学生のUターンを促す

施策4：教育水準の向上・市外の若者との繋がりづくり

「帰ろうかな」を「帰ろう」に繋げるきっかけづくり・Uターンへの不安払拭を達成

25

大野:以上で学生の報告とさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

意見交換

【施策4について】 高校生の教育への期待や不安はどのようなものか？

橋口:地域活力推進課の橋口です。いろんな方とのヒアリングをされて、そういったことから課題を4つに的確に絞り込んでくれたなという感じがしました。具体的な施策については、なかにはもう鹿屋市でも取り組んでいるものもいくつかありますが、やっぱりその視点としてそういう考え方は必要だねという施策になっているなという感じがしております。

4番目の教育水準のところですが、確かに私も鹿児島市内からの移住者でもあるので、こちらに来るときに教育水準というか、子どもの学習面での不安というのは多少あったので必要だなと思うんですが、実際にこちらに住んでいる人たちがそこまでの必要性を感じているのかなということがあります。そもそも論になってしまうんですけど、高校での進学を受け入れ体制が整いすぎていて、競争原理が働いていないんじゃないかなということを感じています。そこは行政も考えていかないといけないところだと思っております。

それぞれのその施策を考えるきっかけになった何かエピソードとかがあったら、教えていただきたいです。

高野:鹿屋高校で放課後に進路相談会を開催したとき、そのなかで中堅大学とか、それ以上の大学に進学したいと考え

ている高校生の方が何名かいました。偏差値の高い大学となった場合にやはり県外進学となり、それを考えたときに勉強に不安を感じる人が多いという印象を受けました。そのときに「家庭教師とか、そういう塾とかないの」と聞いたところ、ほとんどないと伺ったので、ある程度そういう需要も、少数かもしれませんが、あるんじゃないかなと思いました。ただ、おっしゃったとおり、本当に高校の受け入れ体制はすごく整備されていますし、家庭教師の需要は限られてはくるかなと思いました。それ以外に個人的に気になった点といたしますか、すごい理想論かもしれませんが、中堅以上の大学が増えてこないという需要は増えてこないかなと私も思いました。以上です。



橋口:そうですね。高校生の不安は消えていくと思うんですけど、たとえば中堅の県外の大学に進学した後、その生徒たちは帰ってくるかなという。そこにつながるのかなという気も若干します。

高野:いいのは鹿屋市内に大学ができることなんですけど。学生が集まらなると大学も赤字運営になるなど問題があります。

郷原:市長公室の郷原です。施策4の教育のところ、大阪市で実施されているような内容や塾の助成事業を参考にということで出されているんですけど、これはすごくうまくいっているのでしょうか。状況的にはどんな感じでしょうか。

高野:私が知る限り、周りの塾の友達だったり、あと自分の妹や弟もみんな使っているもので、わりと活用されていると思っています。塾に限らず、プログラミング教室だったりとか幅広い習い事にも使えるので、学習塾には限らないなと思います。

【施策2について】 市内外のつながりを生み出す SNS の具体的なイメージは？

郷原:ありがとうございます。市外の人とつながりにくいというので、2番目の施策のところですね、アプリに機能を追加という施策2の2があるんですが、これはどういうイメージですか。何か特定のアプリに機能を追加するというのでしょうか。住民同士が発信するというイメージなのかなと思いますが、既存のSNSでも発信はできると思うんですが、それでは足りないということでしょうか。

木本:僕の案としては鹿屋市に限定した情報を共有できるサービスといいますか。例えば、ツイッターとかインスタグラムとかいろいろとあると思うんですけど、鹿屋市に特化したものをつくることによって、そこでは何かテーマが決められますから、そのなかでいろいろと鹿屋市についての情報が活発に共有できるのではないかなと思いました。

郷原:今、似たような機能で鹿屋市の課題をネットワーク上で議論する場をつくれないう話がありますが、そういったものに近いイメージですか。学生発信であれば既存アプリでできるようなことなのかなと思うんですけど。地域限定でやることに学生さんは盛り上がるのでしょうか。若者の気持ちがよくわからないので教えてほしいです。

木本:今回提案したのは、いつもの日常生活スタイルを共有したりとか、思い出の場所を共有したりとか、そういう感じです。「学生が発信できる場」というのをつくれたらなと思ってまして。僕はラジオサークルに



入っているんですけど、やっぱり自分で主体的にテーマを決めたりだとかして、市の魅力とか、最近のあるあるとかを発信しているとかやっぱり楽しいですし、地域により愛着が持てるんじゃないかなと思いました。ネガティブな話をいうと、歴史を勉強しても、僕はあまり歴史が好きじゃなかったんで、市の歴史を知ったところで、うん…ってなってしまって、それよりは今の魅力、市の魅力をみんなで探すというほうが僕は好きだったので、こういう場があると、何かいいですね。より愛着が湧くんじゃないかなと思いました。



郷原:なるほど。私もそんなのをやりたいなと思います。いいアイデアだと思います。ありがとうございました。

中丸:1つ、よろしいですか。今、アプリに機能を追加という話があったんですけど、学生発信について施策提案をしようと話し合った経緯についてお話します。今は行政の方が主に情報発信をされていると思うんですけど、鹿屋市に住んでいる人にも発信者になってもらい、鹿屋市に今住んでいる人たちが知っている鹿屋市のよいところを発信してもらったらいいのではないかなという話になりました。そういうふうに行政の方だけでなく鹿屋市内に住んでいる人が発信するのであれば、せっかくだったら、学生の方たちにも発信してほしい。発信してもらったなら、そういった場も一緒に用意できたらいいよねという話し合いの流れで、学生だったらアプリも使いこなすことができるかなという考えで、こういった学生発信という提案をさせていただきました。



郷原:ありがとうございます。施策2の1にある鹿屋あるあるグランプリだとか、フォトコンテストだとか、何か企画ものがあるんですけど、その企画に乗っかるようなイメージですか。学生発信については学生自身がテーマをつくるとか、そういう話なのか。学生のコーナーをつくることなのか。

中丸:そうですね、もちろんこういったフォトコンテストを学生だけにやってもらうかたちでもいいですし、学生に限らず、鹿屋市という大きなくくりでやってもいいのかなというふうに思います。

市の広報誌「広報かのや」は紙ベースもあればアプリ版にもなっています。それとは別に新しいものをつくるということもありえますが、既存のものに追加して、そういった広報誌的な場所に学生が「鹿屋のこういうところをいいと思っている」というのを、まず鹿屋市内で「鹿屋っていいところだよな」という機運を高めていくというねらいも、1つあります。

【施策1について】企業誘致と地元若者のニーズ・採用とのマッチング

藤田:地域活力推進課の藤田です。学生の皆さんにちょっと質問です。課題1のところに給与水準の上昇という課題が設定されています。この課題に対する施策はたぶんつくるのは難しいんですけど、この給与水準の上昇という課題を克服するのにどういう取り組みがあるかなというふうなお話をされたと思うんですが、その話し合いの中でどういう議論がなされたか、ちょっと教えていただきたいです。

仲田:お話しさせていただきます。この給与水準のところなんですけども、市役所の方々の話とかを聞いても、第一次産業とか、それを加工するような産業に力を入れているような印象を受けました。そうした話が学生のなかで出てきまして、でも、そこだけだとやっぱり都市部に近い、それに準ずるような地域にある仕事と比べると、やはりお給料が少ないことへの不安が少なくないのではないかなという話になりました。収入の部分が気になる人はなかなかUターンしてくれないんじゃないかなというところを課題に感じました。そういう流れから、第一次産業とか、それを加工するような産業以外の会社さんに入ってもらうために、テレワークという手が取れるんじゃないかなと。ただ、給与以外にやりがいの面で

もいろんなやりがいのある職業があれば、給与にかかわらず「こういうお仕事があるなら帰ろうかな」って思ってもらえるんじゃないかなというところで、施策1の1の業種や職種の多様性の向上みたいな話も出てきたという流れになっています。

藤田: ありがとうございます。給与水準が高い企業に地元に来てもらうということでテレワークの推進というのがあったんですけども。確かにテレワークの推進が進むと、そういった大きな企業とか、給与水準が高い企業が鹿屋市に立地してくれるというところはあると思うんですが、実際にそこの企業の社員の方たちがこちらに移住してきて生活をするということはあっても、必ずしも地元の方々がその会社に採用されるとは限らないと思うんですね。その部分についてはどのように考えられますか。



仲田: テレワークをやっている企業に来てもらうという面に関しては、地元の方をそこに採用してもらおうという話の流れで出てきたわけではないので、正直そこに関しては考えられてはなかったところではあります。

今井: 私は今のご意見を聞きながら、施策1の1と施策1の2がうまくまざり合うことも1つの手なのかなと思いました。外から来られた会社と地域がどうつながっていくか、そういう場をどうつくっていくか、そうした企業との新卒採用シーンをどうつくっていくかということを思ったんですが、学生さんの中でそういった意見はなかったですか。

仲田: そこに関してちょっと一言。私自身は就職活動をしている身です。NTTさんとか全国展開している企業さんが最近「ゆかり採用」を推進しているという話を伺ったことがあります。今、民間企業さんとしても、地元の人を採用したほうが社員さんのQOLが上がるという話も出てきている風潮はあるのかなと思ったので、そういう流れをしっかりとキャッチして、そこに地元の人が採用してもらえるように何かそこをマッチングするような機会を合同でつくるみたいなこともできるんじゃないかなというふうに、今思い出したことなんですけど、感じています。

大野: 自分も1点、いいでしょうか。僕も今話を聞いていて、すごいアイデアベースにはなってしまうんですけど。やっぱり鹿屋市って第一次産業が盛んという印象を持っています。その第1次産業を生かせるような例えば加工場、食品加工、そういった加工の第二次産業、そしてその販売の第三次産業につなげるような、そういった企業さんとうまく連携ができれば、中小企業への支援にもつながるし、雇用も増えていくのかなと思いました。アイデアにはなってしまうんですけど、そういった手もあるのかなというふうに考えています。



郷原: 鹿屋市でもその企業誘致ということで、今おっしゃったように第一次産業のできた産品を加工して高付加価値をつけて、できれば最終製品。一次加工で原料として出荷している会社が多いんですけど、そこを最終製品もつくれる工場を誘致できたらというふうなことで取り組んでいまして、そういう仕事などで給与水準も上げられたいなことを考えてはいるのですが、今のところ現状、その誘致ができる場所がないんです。工業団地をつくろうかということで今、ちょっと動き始めている状況ですね。ありがとうございます。

移住には教育と仕事以外にも、医療、買い物など総合的な検討が必要

本村: 北田大手町商店街振興組合の本村です。教育水準を上げて「帰ろうかな」を「帰る」にするということなんですけど、やはり教育水準も大事だし、それから帰ってきて働く場所というのがなければ、なかなかやってこないだろうなというふうに思っております。ですから、最終的に働くところをどうしてつくるかということが大事じゃないかなと思います。それともう1つは、やはり移住してきてもらえるということになると、教育水準が一番大事だとは思いますが、そのほかに

医療とか買い物、そこらあたりも総合的にいろいろと検討していく必要があるんじゃないかなというふうには思います。以上です。

神谷: 逆に教えていただきたいことがあります。今回は企業誘致、若者のニーズに合わせてということで、SNSやアプリでアンケートを実施というのを提案させていただいたんですが、市役所の方からすでに市民のニーズの引き上げをおこなっているということを教えていただきました。具体的にどのようにおこなっているのかなというのが少し気になったので、教えていただけたらと思います。



郷原: 市民ニーズという意味では、市民意識調査というのを毎年冬場、1月、2月ぐらいにやっています。それは鹿屋市が総合計画というのを持っていて、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」というのをベースに、満足度を調査しています。やはり今、この若者のニーズということで、若者までちょっとこの集計をしたのを具体的には見てないんですけど、確かに若者を定住させるためには、企業誘致が必要だとか、高い給与を支払ってくれる企業が必要だというふうな意見もいただいているところです。ホームページ上にも公開していますので、すごく自由意見でいろんな意見をいただいていますので、今後また何か勉強する機会がありましたら、ちょっと参考にしていただければ大変にありがたいと思います。答えになっているか分かりませんが。



神谷: ありがとうございます。

八木: 地域活力推進課の八木と申します。施策1のところで質問があります。施策1の目的は、職種や業種の多様性向上、給与水準の向上により、仕事の不安払拭とされていると思うんですが。それに対して施策の1の3については、テレワークを推進する企業との協定締結・タイアップとされていましたが、地方である鹿屋市に来てテレワークを続けるということで、給与水準が高い中で仕事ができるということは理解できるんですが、その下には富士通さんのワーケーションパートナーシップのことが書かれています。ワーケーションは仕事をしながら旅行を楽しむというようなイメージだったので、このワーケーションと給与水準の向上につながる仕事の不安の払拭は、どのようにつながっていくのかという点を教えていただきたいです。

仲田: おっしゃるとおりワーケーションのかたちはすごくいろいろとあるみたいで、短期間で旅行を楽しみながら働くというかたちもあるし、もっと長期的な視点で、長期的な滞在でその仕事とワーク・ライフ・バランスの両立みたいところで話が出てきているところもあります。このワーケーションというのが最近になってちょっと注目されてきているので、まだまだ推進される余地があるというか、まだまだ成長過程にあるような取り組みということだったので紹介しました。これからもっとこのワーケーションというのが進んでいって、短期のワーケーションではなくて長期のワーケーションということになってくると、長期で実際にほぼ住んでいるみたいな感じで働くに当たって、ここに実際に住んでもいいのかなというふうに思えることもあり得るんじゃないかなと思い、一例としてあげているというかたちです。質問のお答えになっていますでしょうか。

八木: ワーケーションを地方ですることによって、その地方の土地に愛着が湧いて移住をしてくれてという、そういった話ということですね。わかりました。ありがとうございます。

鹿屋の魅力をうまく使ったUターン・Iターンの促進アイデア

柿: 学校教育課の柿といいます。今日はありがとうございます。学生の皆さんが一人おひとり、そもそも鹿屋内での魅

力をすごく味わられて、そして本当に鹿屋の一員のような自分ごととしてかなり具体的に考えてくださっているのが、なんて素晴らしい若者たちなんだと思っているところです。この7名が鹿屋に来てくれることが一番いい解決策になるんじゃないかなと思ったりもするんですが（笑）。それぞれが言われていた自然のよさとか、食事とか、こういった点でのアプローチというか、アイデアというか、そういうのは出てきたでしょうか。

大野: 1つ意見として出たのは、先ほどのSNSの活用で学生発信といったところです。鹿屋高校の高校生とワークショップをするなかで、鹿屋市だったりとか、大隅半島のよさとして、やっぱり自然がきれいだったりとか、ご飯がおいしいだったりとか、そういったことをあげてくださる学生さんが非常に多くて、もうそれでワークショップの付箋がいっぱいになるぐらいたくさん書いていただいたんですけれども、そういったものを発信する機会がやはり少ないなといった印象を受けて、こういった学生発信の機会を設けることによって、鹿屋市もそうですし、大隅半島の文化、食文化だったりとか、自然を発信する1つの契機になればいいなと思っています。

仲田: 自然のきれいさとか食事のおいしさを移住とかUターンにつなげられないかという話だったと思うんですけど、私は繁昌さんに伺った話がすごく印象に残っています。繁昌さんがおっしゃる話だと、自然がきれいとか、食べもののおいしいところって日本中を探しても本当にいろんなところがあって。鹿屋ももちろん魅力的なんですけど、もっとわかりやすく魅力的なところに行ってしまうんじゃないかっていう話を伺って、それがすごく印象に残っています。確かに、私もそうだなと。例えば鹿児島島だったら、もう屋久島に行こうってなっちゃうとか、そういうことってあり得るんじゃないかなというふうに感じています。だからこそ、鹿屋に人と人とのつながりを感じている人を中心に帰ってきてもらうとか、Iターン、Uターンで来てもらうということが大事なのかなというふうに個人的には思うところもあります。以上です。

黒木: 地域活力推進課課長の黒木です。今日の提案のなかで自分は頭が固いなと思ったのは、企業誘致を長くしているなかで、声を聞くとか、所得を上げるとか、いろんなことに留意しながらやってきたわけですが、今日みなさんが率直に「こう思います」と言ってくださったところは全然触れてきてなかったところです。今まで十何年も企業誘致をしてきて、だめだこりゃというのをつくづく思わされたところでした。今、お話があったとおり、人とのつながり、それから鹿屋市を好きになってもらうなど、いろいろと方法を模索していますけど、今回はみなさんに来ていただいていろいろとお話できて、見てもらって感じてもらって、おいしい「小鹿」を飲みながら語り合ったのが、今後につながっていくのかなというのを思ったところです。せっかくご縁をいただきましたので、今後もお付き合いをしていただければと思っています。今日はありがとうございました。

挨拶 郷原竜児（鹿屋市市長公室 市長公室長）

郷原：4日間という短いというか、それなりに長い期間だったんでしょうけど、PBLということで足を運んで現場で課題を探して提案をしていただくというこの取り組み、すごくありがたいなというふうに思っています。われわれも「人口減少対策ビジョン」をつくったなかで、おじちゃん、お姉ちゃんかな、がつくったものが、果たして若者に響くんだらうかということとをすごく心配をしていたんですけど、似たようなかたちで、われわれが思っていた課題と皆さん方が指摘してくれた課題が近いかたちであがってきている。そしてまた取り組みの方向性としても、間違っていなかったのかなということで、少し安心したところでございます。鹿屋市をすごく皆さんに気に入っていただいておりますので、また何かの機会を捉えてですね、こちらのほうに足を運んでいただいて、またわれわれと意見交換しながら交流していただけたらありがたいなと思います。今日はありがとうございました。

挨拶 川端亮（大阪大学教授）

川端：私もこのPBLが始まって3年間で10回ぐらいかとは思いますが、鹿屋に訪問させていただきました。皆さん方に温かくいろんなことを教えていただき、本当にありがとうございます。今年の学生さんのPBLに関しても、3泊4日の間に鹿屋の皆さん方がさまざまに対応していただき、いろんなことを教えていただいたからこそ、今日の発表ができたのではないかと思います。そういう意味でいうと、鹿屋の皆さん方に与えられた材料がそのまま出てきたので、鹿屋の方々が思っている人口減少施策と同じような結論が出たというのも、そういうことかなと思わないでもありません。



しかし、3泊4日、短いような、長いようなところで学生たちは非常によくやってくれたと思います。とはいえ、やっぱり短い期間ですので、私も10回ぐらいしか行っていないのですけれども、そういう視点から見れば、やっぱりもう少し長いこと調べれば、もうちょっといろんな人たちに会えば、さらに違う結論が出たんだらうなというようなことを思う点は多々ありました。このなかの何人かでまた鹿屋に行って防災を通じてでも、いろんなことを考えてくれれば、うれしいかなと思いますし、いろいろと温かく接していただいた鹿屋の皆さん方に少しでも恩返しができるようなことではないかなとは思っています。

一言だけ私も感想を言わせていただくと、施策の4つに関して、学生さんはよく考えたとは思いましたが、それぞれほとんどアカデミックの背景のある施策というのはなかったと思います。もう少しターゲットを絞ったときの、どういう階層のどういう人たちがUターンしてとか、どういう人たちがどういう特性のSNSを使うのかとか、そういう研究はたくさんあるわけですから、そういうものをですね。鹿屋に行く時間は限られていましたから、3泊4日、見る部分は仕方ないところがあつたと思いますが、それから1カ月半の間、もちろん学生の皆さんは非常に忙しいというのはよくわかってはいますけれども、そのなかで考えることはありますから、またこの3泊4日で得た経験を大学のなかでこれからでも勉強して少し考えて提案するということも、またできたんじゃないかなというふうには思うところはあります。

でも、いずれにしてもこの大学の学生さんたちが実際に鹿屋を訪問させていただいて、鹿屋で非常に学ばせていただいたということに関しては、鹿屋の方々、皆さんに本当に感謝を申し上げたいと思います。本当にどうもありがとうございました。そして、できるだけ今後にもつながるようなかたちで発展させることができればと思っておりますので、機会があればまたよろしくご指導をお願いしたいと思います。本当にどうもありがとうございました。

参加した教職員の感想

今年もまた鹿屋 PBL に参加させていただきました大阪大学人間科学研究科の川端です。市役所のみなさま、鹿屋高校のみなさま、漁業協同組合、ユクサおおすみ海の学校、北田・大手町商店街、本町商店街のみなさま、大阪大学の学生の学びにご協力いただきまして本当にありがとうございました。今回は多くの方に様々な面から教えていただき、学生が「若者と地域のつながり」をテーマに考え、解決にはつながらないまでも解決の方向性を鹿屋市に提案するということができると思います。

人口減少、過疎化、高齢化は、多くの地域で大きな問題となっており、どここの地域も大学進学による若者の流出、その後の都会での就職により若者が戻ってこないこと、IターンやUターン、移住や関係人口に期待しながらもなかなか人口減少に見合う増加分をUターンや移住では得られないことが全国共通の悩みとなっています。そのなかで全国の地方自治体での成功例については、大学生が調べ、学び、鹿屋の方々にフィードバックすることが「よそ者大学生」の役割ではないかと思います。今年の報告会の発表内容も十分にインタビューや調査の経験が活かされたものでした。報告会に向けても検討を重ねた跡は見られたと思います。しかし同時に、さらに大学で調べるべき課題、学ぶべき点も増えてきたのではないかと思います。この鹿屋 PBL を契機にさらに学生さんたちが学び、成長することができると PBL の価値も高まるか思います。鹿屋での学びも重要ですが、大学内での学びもそれと同じくらい大事である、ということをお大学の教員として付け加えたいと思います。

川端亮（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

2021 年度から始まった鹿屋 PBL は、今年度が最終年度となりました。この 3 年間鹿屋の皆さんには、私を含め参加学生に温かく接していただき感謝申し上げます。

最初の 2 年間は「防災」をメインテーマにしたものでしたが、今年度は「若者と地域のつながり」をテーマに、一度離れた若者がまた地元に戻ってきたいと思えるような町にするための PBL で、学生 7 名が参加しました。地元のいろいろな方から学び、その学びを通して施策や取組を検討しました。

3 泊 4 日の PBL で、私が今でも思い浮かぶシーンは、鹿屋高校生とのワークショップです。大隅半島を知るワークショップで、その中のプログラムの一つ、「大隅半島の好きなところはどこか」を書き込むワークがありましたが、笑顔で各自の思いを模造紙いっぱい記入しているところです。

PBL 参加した学生 7 名のうち 3 名が、その後実施しました「高須町避難所受付システムの実証実験」にも参加しました。上原会長はじめとした高須町町内会は 2022 年度 PBL でお世話になったことがきっかけで、今年度実証実験をすることができました。繋がりを大事に思っていただけは鹿屋の温かさです。

いただいたご縁に対してご恩を（どういうカタチになるかはわかりませんが）これから返していきたいと強く思っています。本当に 3 年間ありがとうございました。

井上大嗣（大阪大学社会ソリューションイニシアティブ特任研究員）



鹿屋フィールドワークの概要をまとめた紹介動画
(10分・2021年度製作)

本事業は、文部科学省「実社会に対応するコミュニケーションの推進事業」(2019年～2023年度)として、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI) が「社会ソリューションコミュニケーター育成事業」の一環として実施しました。SSIでは、「命を大切にし、一人一人が輝く社会」を目指し、命を「まもる」、「はぐくむ」、「つなぐ」という視点から、「共感力」と「構想力」をもって社会の現場の人々と協働して諸課題に取り組む「社会ソリューションコミュニケーター」の育成に取り組んでいます。

鹿屋フィールドワーク2023

[報告書]

2024年3月発行

編集・発行：大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI)

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-8

大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 9 階 B907

TEL : 06-6105-6183

E-mail : ssi@ml.office.osaka-u.ac.jp

Website : <https://www.ssi.osaka-u.ac.jp/>

制作／印刷：有限会社ブックポケット

